

日本近世都市の個別町における文書保管

—京都六角町文書の調査から—

渡 辺 浩 一

【要 旨】

本論文は、近世京都の町人地における共同組織＝行政組織の基礎単位である町（個別町）を対象として、その文書保管を検討する。第一に、京都六角町の町式目から文書保管関連条項を検討する。第二に、1803年の町年寄預かり文書目録を分析し、文書の参照可能性の高低による保管場所の区分や、19世紀における文書保管の若干の変化を指摘する。第三に、現存する当時の保管容器の分析から物理的な問題も含めて保管空間を推定する。第四に、六角町という個別町よりも上位の組織である、仲十町組（組合町）および下京（惣町）における文書保管の様相も瞥見する。

以上から、現存六角町文書の階層構造について、サブ・フォンドを想定する。また、京都における町方文書保管の特徴は、交代制の担当者（個別町における町年寄）・担当組織（組合町・惣町における当番町）による帳箱の引継という方法であることが本稿の分析からほぼ確定できた。

【目 次】

はじめに

1. 京都六角町と町式目
2. 1803年（享和3）の文書目録の分析
3. 保管空間との関係
4. 上位組織との関係

むすびにかえて

はじめに

本稿では、近世京都の町人地における共同組織＝行政組織の基礎単位である町（個別町）を対象として、その文書保管を検討する。町における文書保管を分析する理由はアーカイブズ学と歴史学の二つの文脈から説明することができる。

第一に、アーカイブズ学の文脈について説明する。アーカイブズ学は、組織体・個人が過去や現在に作成・授受・蓄積した記録史料を科学的に利用するための基礎的かつ実践的な学問体系である。記録史料が多様な学問分野に利用されるためには検索手段を必要とする。この検索手段は、記録史料がその出所である組織体ごとに作成される必要があり、当該組織体における史料群の階層構造分析を反映させて編成されたものである必要がある。さらに、階層構造分析

には原秩序の解明が必要である。そして、そのためには過去の文書保管の研究が不可欠となる¹⁾。つまり、歴史的な記録史料における文書管理研究は、現在の記録史料における記録管理研究と照応関係を持つという表現も可能であろう。

日本近世における記録史料については、村役人文書の管理に関する富善一敏氏・保坂裕興氏の研究からこの分野の研究は開始された²⁾。その後、高橋実氏による近世社会全体における概括的な把握を経て³⁾、藩政文書については相当な蓄積がなされつつある⁴⁾。ただ、町方文書に関しては研究が少なく⁵⁾、特に個別町文書については研究がほとんどない状態のまま放置されている。文書管理それ自体の研究はすでに研究段階としては過去のものになり、口頭や身体表現も含めた情報管理全体の中で記録管理がどのように位置づけられるのか⁶⁾、あるいは管理されていた文書をどのように利用していたのか⁷⁾、が次の段階の関心となりつつある。しかし、町方文書に関しては第一段階の蓄積をこれから築かなければならない。本稿の意義はここにある。

第二に、歴史学の文脈について説明する。一つは都市社会における社会集団の研究への寄与である。どのような文書をどのように保管していたのかを解明することは、その集団の機能と特質を明らかにすることになる。その例としては、岩淵令治氏による仲間組織の研究が存在するだけである⁸⁾。個別町等に関しては、大坂における町共同体の成立過程のなかで個別町の運営主体が町方騒動を経て開発者である町年寄から町中に移行することに伴い文書保管主体も年寄から町中に移行するという変化が観察されている程度である⁹⁾。なお、江戸における「町共有文書・町年寄家文書・町名主家文書の希少性」について町共同体・町役人の江戸固有の特質

- 1) 大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』(吉川弘文館、1986年)、安藤正人『記録史料学と現代』(吉川弘文館、1998年)
- 2) 富善一敏「近世村落における文書整理・管理について」(『記録と史料』2、1991年)、保坂裕興「村方騒動と文書の作成・管理システム」(『学習院大学史料館紀要』6、1992年)
- 3) 高橋実「近世における文書の管理と保存」(青山英幸・安藤正人編『記録史料の管理と文書館』北海道大学出版会、1996年)
- 4) 山崎一郎「萩城櫓における文書の保存について」(『日本史研究』503、2004年)など。この分野の研究状況に関しては高橋実「熊本藩の文書記録管理システムとその特質(その1)」(『国文学研究資料館紀要アーカイブズ編』2、2006年)を参照。
- 5) それでも、以下のような研究はある。渡辺浩一「近世都市における宝蔵と文書『管理』」(『史料館研究紀要』28、1997年)、同「近世都市高山における「町方」文書の保管構造」(高木俊輔・渡辺浩一編『日本近世史料学研究—史料空間論への旅立ち—』北海道大学図書刊行会、2000年)、青木裕一「近世都市における文書管理について—「駿府町会所文書」を中心に—」(『千葉史学』39、2001年)、同「近世都市における惣町文書の構造分析—駿府町会所文書『御用筆筒長持諸書物諸道具目録帳』の分析を事例に—」(千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第46集『記録史料と日本近世社会Ⅱ』2002年)。拙稿はいずれも制度上町方ではない小都市の事例であり、青木論文は惣町文書に関する優れた研究である。個別町文書の管理に関する研究を筆者は把握していない。
- 6) 大友一雄『江戸幕府と情報管理』(臨川書店、2003年)、同「近世中期における幕府勤役と情報伝達」(『国文学研究資料館紀要アーカイブズ編』2、2006年)。
- 7) 2006年3月23日の国文学研究資料館アーカイブズ研究系「経営と文化に関する研究プロジェクト」共同研究会「地域支配と文書管理」における討論。
- 8) 岩淵令治「問屋仲間の機能・構造と文書作成・管理」(『歴史評論』561、1997年)

も考慮しようとする示唆が西木浩一氏によってなされている¹⁰⁾。

他方、個別町は行政の末端でもあったから、個別町の上位組織である組合町・惣町レベル、もしくはそのレベルの町役人、さらには町奉行所までの都市行政システムの研究にも、個別町文書保管の研究は寄与することとなるはずである。この点に関しては、京都の町代や惣町レベルにおける文書管理に関して、「御朱印」（織豊・初期徳川政権が京都の惣町に発給した地子免除等の朱印状）の管理を中心とした河内将芳氏の研究がある¹¹⁾。また、京都における惣町レベルの役人である町代と京都町奉行所の関係を行政情報の蓄積と利用に即して解明した塚本明氏の研究が注目される¹²⁾。以上のように部分的には解明されてきてはいるが、全体的な行政情報の蓄積と利用のシステムの解明はこれからの課題である。

さらには、社会集団の文書保管の変化を観察できれば、その集団の過去に対する認識の変化についてアプローチすることも可能であろう¹³⁾。

上述のような二つの関心のもと、本稿では京都六角町文書が近世後期にどのように保管されていたのかという基礎的な事実を述べることに課題を限定させていただく¹⁴⁾。その場合、文献史料だけではなく、物理的な空間の問題も意識することとする¹⁵⁾。

1. 京都六角町¹⁶⁾と町式目

歴史学においては、町（個別町）は、近世都市の町方社会のなかで最も基礎的な社会集団と考えられている。まず、空間的に把握してみたい。図1は1871年（明治4）の京都六角町（現京都市中京区）の平面図である。図に見られるとおり南北に連なる新町通の両側に短冊状の屋敷地（町屋敷という）が並んでいる。このような形態を両側町と呼んでいる。南北の両端に木戸と番屋があり、番屋には町が雇用した番人が詰めていた。木戸は番人によって夜間や非常時には閉ざされ、町内の平和を計った。このように町は閉じられた空間でもあった。さらに新町通の東側の中央部（網掛け部分）には町会所の敷地があり、ここには町が雇用した用人の住居、町会所座敷、それに土蔵があった。用人はここで町の事務を執り、会所座敷では町の寄合が開

-
- 9) 乾 宏巳「大坂における町共同体の成立」（大阪教育大学『歴史研究』29、1992年、のち同著『近世大坂の家・町・住民』清文堂、2002年に改稿収録）
 - 10) 西木浩一「江戸町触の特質」（竹内誠編『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版、2003年）
 - 11) 河内将芳「近世京都における町共有文書の保存と伝来について」（『地方史研究』237、1992年）、同「近世京都における都市史料の管理をめぐって」（『歴史評論』561、1997年）。
 - 12) 塚本明「町代」（京都町触研究会編『京都町触の研究』岩波書店、1996年）
 - 13) 渡辺浩一『まちの記憶—播州三木町の歴史叙述』（清文堂、2003年）
 - 14) なお、本稿は、国文学研究資料館編『史料叢書7 近世都市の組織体』（アーカイブズ研究系企画、渡辺浩一担当、名著出版、2005年）を前提としている。そのため、行論の都合上、『史料叢書7』の解題と本稿の記述が重複する部分があることをお許しいただきたい。
 - 15) 高木俊輔・渡辺浩一編『日本近世史料学研究—史料空間論への旅立ち』（北海道大学図書刊行会、2000年）序章参照。
 - 16) 六角町に関する研究には、谷直樹「京都六角町の宅地割と居住者の動態」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』1976年）、大川勇次郎『徳川時代の社会史』（吉川弘文館、2002年）第一章がある。

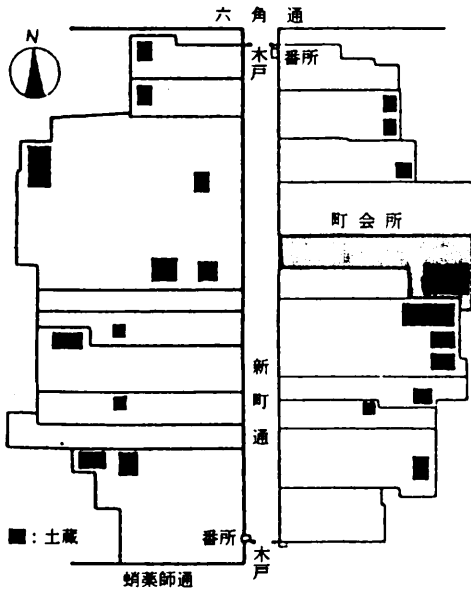


図1 谷直樹注16論文の図をトレース

の町共同体は「地縁的職業的身分共同体」であると言われている¹⁷⁾。権力との関係では、家持町人はその所有する町屋敷の間口に応じて本来は労役である役を負担していた。この役負担者のみが町という組織体の運営に参加できたのである。

なお、京都の個別町の代表者は町年寄^{ちやうどしより}といい、享保期以降家持町人が三年交代で勤めることになっていた。

町という組織体の共同体としての側面を最も端的に表現しているのが、町式目^{ちやうしきめく}である。ここでは、1751年（寛延4）の町式目¹⁹⁾を文書保管に注目しながら見ていきたい。

都市は住民の交代が激しいため、共同体としての結合を保つには誰が構成員であるかということを行為として明確にしておく必要がある。このため町式目の中心は、相続・売買などで正式構成員が交代する場合、あるいは正式構成員の養子や嫁入りの場合に関する手続きと挨拶に関する規定となる。特にここでは「譲り状」に関する規定を後述の文書保管との関連で引用しておく。

(15) 一、御割印譲り状町中披見之上其人ニ為致封、町帳箱江可相納事

譲り状とは相続などを原因とした構成員の事前手続きの文書である。これについて、割り印を施した譲り状を町の構成メンバー（家持町人）に見せたうえで封をして町の帳箱に納めよ、というのである。ここには記されていないが、譲り状が帳箱に保管されると共に町年寄は町で記

かれ、土蔵には祇園祭の山車である北観音山が分解収納されていた。このように町という団体は、木戸・番屋・町会所という共同施設を持っていた。

このような空間的特質を持つ町は、まず第一に近隣住民による地縁的共同体であった。ただし、町という空間には、町屋敷の所有者である家持町人の外に、家持町人から土地を借りる地借、それに街路に面した町屋を借りる表店借、表店の奥に住居を借りる裏店借、さらには家持・地借・表店借などに雇用される多数の奉公人が居住していた¹⁷⁾。しかし、町^{ちやう}共同体の正式の構成員は家持町人のみであり、その意味では身分的な団体であった。また、家持町人が町という地縁的枠組みによって各自の多様な種類の営業（職業）を相互に保証した。こうして近世

17) 六角町文書には宗門人別帳が現存しないため彼らの実態は不明である。

18) 朝尾直弘『都市と近世社会を考える』（朝日新聞社、1996年）

19) 前掲『史料叢書7』45-50頁。『叢書京都の史料3 京都町式目集成』（京都市歴史資料館、1999年）223-228頁。国文学研究資料館架蔵マイクロフィルムF7611「京都六角町文書」№3-16。国文研架蔵のマイクロフィルムは京都市歴史資料館のマイクロフィルムを国文研附属史料館（通称国立史料館）が1976年にデュープさせていただいたものである。なお、このフィルムの番号は以下 [3-16] と表記する。

帳・保管している「譲り状控帳」へ譲り状を転写した。ここでの「町帳箱」は、現存する六角町文書保管容器のなかでは「譲状入」と墨書された白木の箱がこれに該当するものと思われる。この点については後述する。

次に、町の複数の帳箱に関する規定がある。

(47) 一、町帳箱之儀は年寄封印ニ而鎔は年寄ニ預ケ、帳箱は外江預ケ可申事
町の帳箱は町年寄が封印し、鍵は町年寄に預け、帳箱それ自体は「外」へ預けよ、というのである。ここでいう「外」とは、町年寄自身が帳箱を預かることはしないという意味であろう。実際の設置場所は町会所であったと想像している（後述）。

町の帳箱に関しては町年寄交代規定のなかにも出てくる。

(56) 一、年寄代り廿七日直ニ譲渡、於会所寄会之事

新年寄	着座羽織袴脇指
月行事	式人 同断
先年寄	袴なし
古老衆	同断
五人組衆	同断
烈座衆	同断

右之衆中寄合、町帳箱請取渡可有之事

家持町人の輪番制で勤められていた町年寄の交代は、町会所の寄り合いで行われ、新たな町年寄と月行事が羽織・袴・脇差で正装して出席する一種の儀礼的行為でもあった。そのような場で町の帳箱が引き継がれたのである。

以上のように、町という団体の組織規定である町式目においても、文書保管の様相を断片的に垣間見ることができる。

2. 1803年（享和3）の文書目録の分析

文書保管の様相を分析する素材としては、周知の通り当時作成された文書目録がある。現存六角町文書には「町中帳面諸書物目録番附帳」という表題の半紙判横長帳がある²⁰⁾。その内表題は「享和三年亥十一月書改 年寄役預帳面書物覚」であり、ここからまず第一に「書改」との文言に注目すれば、1803年11月以前から文書目録は存在し、このときに書き改められたことが判明する。第二には、登録されている文書は町年寄が保管の対象にしている文書に限定されていることもわかる。その意味では、この目録は前節で見た町式目の47条、56条に対応する目録なのである。

次に、この目録の様式を紹介する。

巻		巻冊
一	式拾一ヶ条御触書	
(朱書)		
	「一番箱入」	

20) 前掲『史料叢書7 近世都市の組織体』82-99頁、[11-108]。

式		
一	右同式拾一條 (朱書) 「一番箱入」	壹冊
三		
一	九ヶ条御触書 (朱書) 「一番箱入」	壹通
四		
一	譲り状扣帳 (朱書) 「一番箱入」 (追筆) 「四之二又壹冊」	壹冊 二冊之内
五		
一	年寄五人組判形帳 (朱書) 「一番箱入」	壹冊
六		
一	町中借屋共判形帳 (朱書) 「一番箱入」	壹冊
七		
一	家買家督寺請帳 (朱書) 「土蔵入」	壹冊
八	(朱書) 「合」	
一〇	御神酒差上候扣帳 又新帳一冊	(朱) 壹冊〇

冒頭部分を引用してみた。このように、番号・文書名・点数・形態(冊・通など)は基本情報として完備され、年月を明記するものもある。日本近世社会における文書目録としては整った形式を持つものである。「八番」の「御神酒差上候扣帳」に見られるように、帳簿の余白がなくなって新帳が作成されると「又新帳一冊」というように追加登録される。そのほか、「合」という朱書や数種類の合点も見られ、何らかの照合作業を行ったものと思われるが個々の記号の意味は不明である。

このような様式で番号は242まで打たれているが、68番のあとに宗門帳が3冊無番号で記載されているため、登録されている文書総件数は243件となる。このうち、1から68番および宗門帳が同筆で記載され、69番から筆が変わり131番まで数度の追筆がなされる。この部分の年代は1804年(文化元)以降と戦国・織豊期も含めた古い年代が散見される。131番のあとには、

従是古来書物帳面目録番附ニ相洩候分、并ニ新規ニ相増候分共、此度文政七年申閏八月廿七日町中立会番附致シ、目録帳面へ書加

という記載がある。1824年に追加登録があったというのである。このうち「古来の文書で目録番付から洩れた分」は132から152番までが該当する。そのあとに、「従是町代一件後新書物之類」とあって153から242番までが記載されており、この部分がこの引用史料の「新規に増加した分」にあたるものと思われる²¹⁾。最新年代は242番の1843年(天保14)である。もっとも、153番以後でも「町代一件」以前つまり1817年以前の文書も少なからず含まれている。

このような経過からすると、1803年11月に最初にこの文書目録が作成された時に記載されたの

は68番のあとの宗門帳までであり、69から131番までが1824年（文政7）閏8月27日以前に逐次追記され、それ以後1843年までに132から242番までが記載されたということになる。つまり、この目録は大きく分けて三段階に区分されることとなり、短くとも1804年から1843年まで40年間にわたって使用され続けたこともわかる。

この文書目録の使用については、表紙裏の4つの貼紙・掛紙が興味深い²²⁾。最初の一つだけ引用しておこう。

（表紙裏貼紙）

「文化子秋

改候処不見分扣

（抹消）

「○

壱番 二拾壱ヶ条定書」

（朱書）

「文政三年辰正月廿七日改申候処、此品在申候」

（抹消）

「廿七 宝暦十四年古京寄合の書付」

（朱書）

「右同日改申候処、無之候」

（抹消）

「五十六 御拝礼順番扣帳」

（朱書）

「右同日改申候処、無之候」

○（抹消）

「六拾六 年寄組之帳印形」

（朱書）

「右同日改申候処、在之候」

（抹消）

「八拾五 神事中之扣」

（朱書）

「右同日改申候処、無之候」

（抹消）

「六拾四 三井次郎左衛門御用帶刀御免 壱通」

（朱書）

「右同日改申候処、在之候」

（朱書）

「文政三辰正月廿七日改候処、見へ不申候」

八拾五 神事中之扣」

これによれば、1804ないし1816年（「文化子」）秋に「改候処不見分扣」として6件の文書が記載され、それが発見されると「文政三年辰正月廿七日改申候処、此品在申候」と朱書され、文書名は抹消される。あるいは「右同日改申候処、無之候」という朱書もあり、6件全ての文書にこのような朱の追筆があることから、1820年にも文書の点検が行われたことがわかる。その後、1840年（天保11）2月にも行方不明文書として5件リストアップされそのうち3件が抹消

21) なお、「町代一件」とは、1817年（文化14）に町組（京都における組合町のこと）が18世紀中期以来の町代（町組と町奉行所の間に介在する町役人）の権限拡大に反発して起こした大訴訟で、町組側の主張がほぼ認められる形で終息した事件である（杉森哲也「町組と町」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅱ、東京大学出版会、1990年））。

22) 前掲『史料叢書7 近世都市の組織体』82、83頁。

されている。また年代不明であるが7件の文書リストがありこのうち5件が抹消される。最後に1844年(天保15)正月27日にも不明文書として6件が挙げられ内1件が抹消される。これらの抹消は、先の引用部分の記載方式から類推すれば不明文書がのちに発見されたことを示している可能性がある。なお、文書点検が行われた可能性のある一つの年代と、点検が行われた三つの年代のうち、1840年11月と1844年正月27日については、町年寄の交代はなかったことが、1816(文化13)～1874(明治7)年「譲り状之扣」[15-185]、1828(文政12)～1850(嘉永3)年「家売買之帳」[12-128]、1828～1853(嘉永6)年「金銀入帳」[6-27]に登場する町年寄名で確認することができるので、町年寄の交代に伴う帳箱の引継時に文書の点検がなされているわけではない。

以上のように、定期的であったかどうかは不明だが、この目録に基づいて文書の点検が行われていたことが判明する。

さて、いよいよ目録本文の検討に入る。

先に引用した本目録の冒頭部分で、最も注目されるのは、「一番箱入り」・「土蔵入り」といった朱書である。これらは保管場所を表現したものと考えられる。保管場所注記が付されている文書は、この目録の3区分のうち二つ目まで、つまり131番まで、1824年以前に登録されたものに限られる。このうち「一番箱入り」との注記がある文書は59件、「土蔵入り」との注記がある文書は4件、「土蔵入り」の注記が抹消されているものが2件(78、80番)ある²³⁾。「一番箱入り」文書のうち、表題から内容年代が判明するか、文書が現存しており作成年代や内容年代が判明するものに限って表1に示してみた。二重線よりも上が本目録作成時つまり1803年(享和3)に登録された文書である。その内容年代を見ると1803年時点では使用されていない文書に「一番箱入り」との注記が付されているのではないだろうか。例えば、4番の譲り状扣帳は1700～1753年の譲り状が筆写されている一冊目の帳簿と1754～1779年の二冊目が「一番箱入り」とされており、31番の1779～1814年の三冊目(表2に掲出)にはそのような注記がない。三冊目は1803年時点ではまだ使用されているから「一番箱」には入らなかったものと思われる。12番については1861年まで使用されているので、この注記は誤記でありそのために訂正されたと解釈する。1から3については1620、1629および1654年に京都所司代が惣町に対して発給された著名な町触である²⁴⁾。5点見られる人数改帳は定期的に作成されるものであって古いものを町年寄の手元に置いておく必要はない。25と60は当該事案が終了すれば新たに記入がなされることはないと考えられる帳簿である。

65番のあとの(無番号)宗門帳については、以下のように解釈する。宗門帳は毎年作成され、転居や婚姻などがあった際にはその年の帳面を訂正・追記していき、そうした書き込みのある帳面に基づいて次の年の新しい帳面が作成されるというものである。したがって、ここに付さ

23) 保管場所注記がいつなされたかが問題であるが、ここでは目録作成からそう遠くない時点で注記がなされたことを前提として考察を進める。仮に、この目録の使用期間の最新時点である1844年に注記がなされたとしても考察の過程と結果は変更する必要がないと判断している。

24) この二つの町触は、個別町における毎月の寄合の冒頭に読み聞かせることになっていたので利用頻度が低いわけではないが、寄合の場所は町会所座敷であるから町年寄の手元に置く必要がない文書である、と考えておく。

表1 保管場所注記文書の内容年代

番号	表 題	点数・形態	保管場所注記	作成年代（内容年代）	現存文書マイクロ史料番号
1	式拾一條御触書	1冊	一番箱入り	（元和6、寛永6年）	（現存せず）
2	右同式拾一條	1冊	一番箱入り	（元和6、寛永6年）	2-8
3	九ヶ条御触書	1冊	一番箱入り	（承応3年11月）	（現存せず）
4	譲り状扣帳	1冊	一番箱入り	享保5年12月（元禄13年12月～宝暦3年8月）	14-182
1月4日	四之二又老冊	1冊	一番箱入り	宝暦4年正月（～安永8年4月）	15-183
12	山道具預ヶ帳	1冊	一番箱入り （朱書抹消）	天明7年6月（～文久元年）	19-338
25	御役所銀三拾年賦被仰付候留書	1冊	一番箱入り	宝暦14年	（現存せず）
28	判形帳	1冊	一番箱入り	明和9年6月	（現存せず）
32	人数改帳	1冊	一番箱入り	安永3年5月	（現存せず）
38	人数改帳	1冊	一番箱入り	安永9年5月	（現存せず）
41	人数御改帳	1冊	一番箱入り	天明6年5月	（現存せず）
54	惣人数改帳	1冊	一番箱入り	寛政4年5月	（現存せず）
60	御山屋根出来ニ付入用委細書帳面	1冊	一番箱入り	寛政9年6月	19-355
65	惣人数改帳	1冊	一番箱入り	寛政10年5月	（現存せず）
（無番号）	宗門帳	3冊	宗門帳年々左之方土蔵入り	享和元～3年	（現存せず）
75	御所司代迎イ 酒井讃岐守様御上京之節一式留メ	袋入	土蔵入置候	文化5年か	（現存せず）
78	古京六組四朔参会合仕法書	1冊	土蔵入り （朱書抹消）	天明元年閏5月9日	26-450
83	惣人数改帳	1冊	一番箱入り	文化元年5月	（現存せず）
84	惣人数改帳	1冊	一番箱入り	文化7年5月	（現存せず）
89	大久保加賀守様御所司ニ付御登京諸書留	1冊	一番箱入り	文化13年5月	（現存せず）
105	祇園会	1冊	一番箱入り	天文6年	（現存せず）
106	官途帳	1冊	一番箱入り	天正7年	（現存せず）
107	大福帳	1冊	一番箱入り	慶長18年	（現存せず）
108	町振舞日記	1冊	一番箱入り	天正12年	（現存せず）
111	触帳之写	1冊	一番箱入り	明暦元年11月～4年6月	2-11
120	豊太閤様御時代書物	1袋	一番箱入り	16世紀末	（現存せず）
123	家数并間口裏行之覚	1冊	一番箱入り	寛永12年10月、同14年11月	16-279
124	御救米被仰附候節之書附	1冊	一番箱入り	延宝2年1月28日	9-73

れた「宗門帳年々左之方土蔵入り」という注記は、宗門帳は毎年新しい帳面が作成されると前年ないし前々年のものは土蔵に入れているということを意味しているのであろう。宗門帳に関連しては次に引用するような登録もある。

式拾三

一 宗門帳入箱	壺ツ
(朱書)「土蔵入」	外二四ツ
	メ五箱

これによれば五つの宗門帳専用の箱が土蔵に置かれていたことがわかる。したがって、23番と65番の記載を総合すれば以下のような想定が可能である。宗門帳は毎年新しい帳面が作成されると前年ないし前々年の帳面は土蔵にある「宗門帳入箱」に納められた。

二重線より下は、1804年以後1824年以前に登録された文書である。このなかで1804年以後に作成された文書が4点あるが、いずれも作成後数年を経ずして土蔵ないし一番箱に入れられたものと解釈する。また、105番以降の8点つまり17世紀以前の文書は、日々の必要から使用される文書というよりは、歴史意識にかかわる文書である（後述）。

以上からは「一番箱入り」もしくは「土蔵入り」とされた文書は、その時点で使用していないか、当面参照する可能性が低いと判断されたために、年寄預り文書のなかから別置されたものと解釈すれば、理解可能な注記となる。

次に、保管場所注記がない文書で、文書名に作成年代が含まれるか、もしくは文書が現存しており作成・内容年代が判明するものを表2に示した。二重線より上の文書が1803年に登録された文書であり、このうち16番を除いてはいずれも1803年時点で新たに記入され続けているものである。二重線より下の文書については、1824年までに逐次登録されていった文書であるから、その内容年代を見ると、例えば93番の新たに作成された4冊目の譲り状控帳はこの時期には譲り状が町に提出される度に転写され続けていた文書である。その他の文書は特定時点作成の文書であり、104番を除いては作成と同時か、それほど年数を経ずに目録に登録されていたことがわかる。このように、保管場所注記のない文書は目録登録時点では新たに記入され続けていたか、参照可能性が高いものと判断されたものであると解釈できる。

最後に、この目録に見られる文書保管容器の記載を検討してみたい。

式拾

一 会所ニ有之候帳箱鍵

式拾壺

一 年寄預居候帳箱鍵

四拾（朱書）「合」

一〇借屋人宅替行先留新帳 壺冊（朱）「〇」

并捨子行先 又一冊

北南辻ノ事 （朱書）

申合セ書付別紙ニ有「合」

但し譲り状之箱之内ニ入置候

これら三か条の引用から、町会所にある帳箱、町年寄が預かる帳箱、譲り状箱の三つの文書保

表2 保管場所注記のない文書の内容年代

番号	表 題	点数・形態	備考	作成年代（内容年代）	現存文書マイ クロ史料番号
11	御山寄進帳	1冊		享保9年6月（～文政7年6月）	19-328
13	仲之組定法書帳	1冊		（享保6年8月～文政7年6月）	26-449
15	京都因縁書帳	1冊		（元龜4年7月～嘉永6年12月）	2月6日
16	古代事書集帳	1冊		（天正15年～享保8年）	1月4日
31	譲り状之扣帳	1冊		安永8年12月（～文化11年4月）	15-184
39	家売買之扣帳	1冊		寛永3年2月（～文化13年8月）	12-127
90	帯刀ニ付御差免到来 書附委細控	1冊		文化13年5月	（現存せず）
92	惣人別改帳	1冊		文化13年5月	（現存せず）
93	譲り新帳面	1冊		文化13年9月（同2月～明治7 年8月）	15-185
98	御山屋根再興積金控 帳	1冊		文政2年2月	20-341
99	同（御山屋根再興） 金預控帳	1冊		文政2年10月	20-342
104	御拝礼上下京 年寄 宅人罷下候様被仰付 候ニ付上京下京取合 一件之書留帳	1冊		天明8年12月	（現存せず）
130	町式目帳	1冊		文政2年7月	3月18日
131	板倉周防守様廿一ヶ 条御触書、牧野佐渡 守様九ヶ条御触書	1冊	町代一件 関係書類 （一袋入 り）	（元和6、寛永6、承応3年）	（現存せず）
	文政公裁書	1冊		文政元年12月	30-464
	御聞濟九ヶ条目録 并式目改之条々	1冊		文政2年7月	30-465

管容器を抽出できる。特に、双方とも鍵に関する記述として、帳箱が町会所にあるものと町年寄が預かるものの二種類に区別され、しかもそれが連続する条項で表現されていることから、「町年寄預り候帳箱」は物理的にも字義通りの意味にここでは受け取っておく。そのほかにこれまで出てきた保管容器の表現は、一番箱と土蔵の宗門帳入り箱がある。合計五つの保管容器の表現がある。

これら目録上の保管容器表現と、先に検討した町式目での保管容器表現をつき合わせてみると以下ようになる。町式目では15、47、55の三か条で同一の「町帳箱」という表現であったが、各々条の記載内容から考えると、それぞれ別の帳箱であったようである。すなわち、15条は譲り状箱、47条は町会所帳箱、55条は町年寄預り帳箱、であろう。

また、文書と保管場所の関係を示唆する記述には以下のものがある。

三拾五

一 借家請状并ニ寺請状入

沓袋

但し古キは会所帳箱へ納メ

三拾六

一 借家請人寺所之扣所書帳 貳冊

(朱書)「一番箱入」 (抹消)「但一冊古帳土蔵入」

35番の方では古い帳面が町会所の帳箱に入れられていたことを示す。この帳箱は先の20番の帳箱と同一か同種のものであろう。36番では2冊とも一番箱に入れてあったが、古い方の一冊が土蔵に一旦入れられて元に戻ったか、土蔵に入れようとしたがそれをやめたかのどちらかである。あるいは単なる誤記の訂正かもしれない。いずれにせよ、文書の動きとしては、古くなると会所帳箱へ、また古いものを一番箱から土蔵へ、という二種類の動きが想定される。ここで、先の保管場所注記の検討を思い出していただきたい。一番箱には町年寄預かり文書のうち当面参照可能性が低いものを入れたと推定していた。とすれば「古い」という表現がこれに該当するであろう。恐らくは一番箱は町会所帳箱のなかの一つであったと思われる。

このように見えてくると、ここで検討している目録は町年寄預かり文書の目録であるから、登録されている文書は全て町年寄の管轄下に置かれていたことになる。しかし、これまで述べてきたことからわかるように、その全てが町年寄預り箱に保管されていたわけではない。恐らくは町年寄の必要に応じて、彼の手元の町年寄預り箱、町会所帳箱、土蔵帳箱に分けて保管されていたのであろう。

ここまでの分析で想定されたことは以下の通りである。

町年寄預り箱は、町年寄交替時に引き継がれ、そこには目録131番までの文書のうち「一番箱入り」「土蔵入り」という注記のある文書65件を除いた66件の文書が収納されていた。

町会所に置かれた帳箱のうち一番箱には注記が付されていた59件の文書が保管されていた。また、町会所には譲り状箱もあったものと思われる。譲り状箱は譲り状提出の都度開かれる必要があり箱の使用頻度が高く、また土蔵に置かれていた形跡もないからである。

土蔵には少なくとも、注記が付せられていた4件の文書と宗門帳箱5箱が置かれていた。

次節では、この時点での町会所の空間と、現存保管容器を紹介し、六角町文書保管の当時の様相をより具体的に考えてみたい。

3. 保管空間との関係

六角町には、町文書を保管するための帳箱が少なくとも四種類は存在していたことが、文献史料から判明してきた。本節ではこの知見を空間に置くことによりさらに考察を深めたい。

まず、帳箱がもっぱら置かれていた町会所の空間は、2節で検討した目録が作成され使用されていた段階ではどのようなものであったろうか。この点については建築史の研究成果を援用したい。図2は1767年(明和4)段階の町会所復元図である²⁵⁾。その後1822年(文政5)に町会所の普請が行われていることが、町年寄預り文書目録158番から窺える。文書が現存していないために普請の規模は判明しないものの、このことから、前節で検討した文書目録が作成さ

25) 谷直樹『町に住まう知恵』(平凡社、2005年)237頁図版10上。

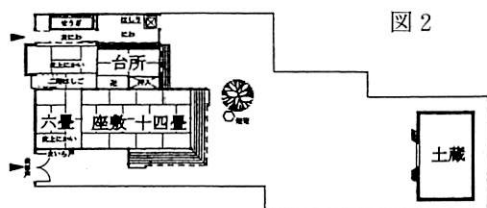


図 2

れた1803年段階の町会所が図2であった可能性が高い。

図のなかで、町会所敷地の北側に入り口を持つ部分は町用人住居であろうか。南側の会所座敷と壁により隔てられているという点で、日常的な町の業務が行われる空間であることが示さ

れている。敷地の南側部分は「一四畳と六畳の二室があり、前者には床が備わり、玄関には舞良戸があって、ここが会所に使用されたと推定される。」と谷直樹氏は述べられているので、この座敷で月に一度寄合が行われたと思われる。町式目に見られる町年寄交代の儀式と帳箱の引継もここで行われたのであろう。こうしてみると、町会所は複数の帳箱を設置するのに十分な空間であることがわかる。町会所の屋敷地の一番奥には小さな土蔵がある。土蔵には日常的には分解された北観音山の部材や装飾品が納められていたが、その片隅に複数の帳箱を設置することはここでも可能であろう。

次に、六角町文書の現存保管容器を検討していきたい。現在、六角町文書は1859年（安政6）建築の町会所土蔵にある。この土蔵は2階建てで、2階入口左側に押し入れがあり、そのなかには祇園祭に必要な物品に混じって多数の文書保管容器が確認された。その大半を表3に掲げる。表の「種別」欄では、特定の帳面専用の箱を「帳面箱」、多数の文書を収納できる容器を「帳箱」、細長い状物を入れるための箱を「状箱」と文書保管容器を概ね三種類に区別した。「蓋固定方式」に関しては説明を要するであろう。まず「埋込錠」とは箱を制作する際に錠部分を組み込んで作成されたものを指す。次に「錠前」というのが箱には金具しかついていないが、そこに錠前を通すことによって錠が掛けられるようになっているもので、錠前が現存しているものを指している。「金具」とは、箱の構造としては「錠前」と同じだが、錠前が現在ついておらず、かつて錠がかかるようになっていたかどうかは不明の箱ということになる。したがって、蓋固定方式としては、制作する段階から錠を掛けて保管することを予定していた埋め込み錠の箱が最も高度なものとなり、錠前を付ける金具すら付いていない帳箱が収納文書の防備という点では最も下位のものに属することとなる。

「帳面箱」の場合は、組紐で蓋を固定することができるものとできないものとは、やはり収納文書の防備能力という点では差があると言える。さらに、材質と塗装に注目すれば、桐であることや漆塗りであることはその箱が上位のものであることを示すと考えられる。すなわち、帳箱と帳面箱・状箱は分けて考えるべきであるが、蓋固定方式と材質と塗装によって文書保管容器の序列づけが可能であるということになる。

そのようなことを念頭におきながら、前節まで検討してきた六角町における文書保管の様相で登場した保管容器について説明したい。

まず、Cの「譲状入」は、町式目47条にある「町帳箱」および目録40番に出てくる「譲り状之箱」に該当する。もちろん、現存のものは1831年製作であるから、これら文献史料上の箱とは別であるが、箱が古くなって作り替えられたものであろう。材質は桐で、蓋固定方式は埋め込み錠と、帳箱のなかでは最も上位の箱（写真1）である。譲り状正文がいかに大切と認識されていたかが分かる。また蛇足ではあるが、町に提出された譲り状正文は町年寄預かり文書ではないことも付け加えておきたい。

表3の1 京都六角町文書保管容器等一覧

記号	種別	蓋表の墨書など	墨書年代など	材質	塗装	寸法 (縦×横×高mm)	蓋固定方式
A	帳面箱	御廟野御出迎定書 下古京 六組中 (漆書)	(蓋裏) 享和元辛酉歳十二月	杉	生漆	372×268×33	組紐
B	帳箱	囃子方勘定書物箱	(蓋裏) 天保四癸巳年六月新調	桐	弁柄	402×266×227	埋込錠
C	帳箱	譲状入 六角町	(底部) 天保二年辛卯九月 六角町	桐	白木	379×271×343	埋込錠
D	帳箱	*町用不要書類		杉	白木	528×356×291	金具・紐
E	状箱	*近代証書類		木製	紙ばり	409×103×67	なし
F	状箱	祇園社寄付地古文書		松	白木	540×73×76	—
G	木札	(囃子方曲口)	天保二年六月	杉	白木	209×380×9	—
H	帳箱	*神事□□		松	白木	453×337×266	金具・紐
I	木札箱	入札記 六角町	(底部) 明治十三年六月再調	杉	白木	366×250×89	なし
J	帳箱	六角町 帳箱		松	漆塗 (黒)	407×337×238	金具・紐
K	帳箱	六角町 帳箱	(蓋表) 明和二歳 巳酉霜月吉日	松	白木	466×344×232	錠前・紐
L	帳箱	帳箱 六角町	(蓋表) 庚安永九歳 子六月吉日、 (側面金具下貼紙) 式	松	白木	547×372×298	錠前・紐
MN	棟札	(省略)	安政6年				
O	帳箱	六角町	(蓋裏) 嘉永貳巳酉年晩夏 六角町	杉	白木	654×446×328	金具
P	帳面箱	御制禁御朱印封印帳 下古 京八組 (漆書)	(蓋裏) 文政四年辛巳十二月	杉	外側弁柄、内側生漆	368×268×56	組紐
Q	帳箱	(なし)	寛政八年辰六月出来 年寄三郎右 衛門 (蓋裏貼紙)	杉	白木	534×353×303	錠前・紐
R	帳箱	六角町	(背面) 文政四歳辛巳九月新調	松	外側弁柄、内側白木	480×396×639	埋込錠 3ヶ所
S	秤箱	(なし)		杉	白木	580×146×72	(なし)
T	帳面箱	下京三番組 六角町		松	白木、内張越前和紙	385×264×80	組紐
U	帳箱	(なし)		木製	洪紙	330×482×226	埋込錠
V	段ボール箱	六角町救急箱		段ボール	なし	360×242×263	なし

表3の2 京都六角町文書保管容器等一覧

記号	種別	蓋表の墨書など	墨書年代など	材質	塗装	寸法（縦×横×高mm）	蓋固定方式
W	帷子箱	(略)		杉		457×750×450	埋込錠
X	木箱	(なし)		木製	ニス	335×490×240	埋込錠
Y	帳箱	御山普請用帳箱		杉	白木	404×284×250	なし
Z	帳面箱	下古京中之組 六角町（黒漆） * 祇園祭礼式		桐	弁柄	352×252×74	なし
以下はRの帳筆筒に納められていたもの							
a	状箱	御触書 六角町	(蓋裏・内側底部・外側底面) 享和三歳亥十一月 六角町	桧	漆	344×73×35	なし
b	状箱	御有志入用 六角町	(外側底面) 小山松 寛政十戊午歳八月	桧	漆	380×127×36	紐穴
c	状箱	六角町	(蓋裏) 弘化二年巳十一月	桐	生漆	386×103×86	埋込錠
d	鍵箱	鍵箱 六角町	(外側底面) 享保四歳亥卯月 新町通六角町	桐	漆	304×220×71	紐
e	帳面箱	彼岸講帳箱	(蓋裏) 慶応四年戊辰新調分前第一日新調 春	桐	白木	300×274×84	紐紐
f	帳面箱	浮下順番帳 下古京七組	(蓋裏) 寛政二歳庚戌九月	桐	漆	320×253×50	紐穴
g	帳面箱	* 御布告拾六枚入 郵便小本一冊入 二月廿一日廻ス 六角町		杉	白木	306×228×41	差込蓋

(以下5点省略)

注 *は貼り紙の文字を示す。



写真1



写真2

C 材質が桐で埋め込み錠という点では、Bの「囃子方勘定書物箱」もそうである。囃子方とは祇園祭の際に北観音山の2階に乗り込んで祇園囃子を演奏する六角町内部の祭礼組織の一つである。囃子方勘定帳2冊が現存し [24-430、25-431]、この箱のなかに現在も収納されているが、これらの文書は前節で検討した目録には登録されておらず、これも町年寄預かり文書ではない。この箱の保管場所が町会所であったのか、それとも囃子方の責任者の家であったのかは判明しない。

次に、材質が杉もしくは檜で蓋固定方式が錠前もしくは金具という帳箱として、D、H、J、K、L、O、Q、Yの8つを挙げることができる。このうち特にKとLは目録作成時点ですでに存在した帳箱であり、目録上に出てくる帳箱はこのようなものであったことがわかる。さらに、写真2のようにLには「式 六角町」と記した江戸時代と推定される字体で書かれた貼り紙があり²⁶⁾、注目される。なぜなら、前節の目録上の保管場所注記として「一番箱入り」という表現があったからである。「一番」と記す以上二番以下の帳箱が想定され、それが現実に存在したことが確認できる。

帳面箱は全部で五つあり、そのうちA、P、Zの三つはいずれも六角町の上位組織である仲十町組という町組（組合町）や下古京という惣町のものであり、厳密にいうと六角町文書ではない。これについては次節で検討する。そのほかTは明治初年に大きく再編された町組の箱、eは六角町内部の講組織の帳面箱であろうか。

状箱は3つあり、そのうちaは前節の目録とほぼ同時に作製されたものである。目録のなかには

式拾式

一 廻状文箱

式ツ

という記載があり、この二つのうちの一つがaの状箱であろうか。

26) 「式 六角町」の貼り紙には、部分的に「第七号北観音山町文書」という洋紙マジック書きの貼り紙が重ねて貼られている。その下に文字が存在しないことは赤外線フィルム撮影により確認した。

表3のなかで特徴的な保管容器はRの帳箆筒である。帳箆筒に言及する研究はいくつかあり²⁷⁾、それらを総合すれば、帳（文書）箆筒は文書を分類整理して収納する機能に優れ、かつ検索して利用するにも優れている。帳箱や長持と併用するとすれば、使用頻度の高いものを箆筒に保管する傾向にある。六角町に現存する帳箆筒は、慳貪蓋と二つの引き出しがあり、そのそれぞれに錠が埋め込まれている（写真3）。慳貪蓋の中には二つの棚板があって三段に分けて文書を収納することができる。つまり、合計5つに文書を分類して収納することが可能であり、すべての開口部に錠を掛けられるようになっているので、出納しやすくかつ文書の保全機能もあるという点で帳箱よりはるかに優れた保管容器である。

先の目録は遅くとも1844年（天保15）年までは使用され、帳箆筒は1821年に作成されている。目録にこの帳箆筒が記載されない点は疑問とせざるをえないが、目録に登録されていた町年寄預かり文書は、一番箱や土蔵に置かれたものを除き、分量的に判断してさらにその一部がこのような帳箆筒に納められていた可能性はある。

以上のべてきたように、町会所の空間復元と、現存文書保管容器の調査を加味してみると、

かなり具体的に、近世後期における文書保管の様相が浮かび上がってくる。

①町年寄が管轄する文書として69件が1803年に目録に登録され、1824年までに62件が逐次追加されていった。ただし、この131件の文書が全て同じ取り扱いを受けていたわけではない。これらのうち新たな記入がなされる予定の帳簿や参照可能性の高い文書は、恐らく町年寄預かり帳箱に収納されていた。町年寄預かり帳箱は、現存文書保管容器K、Qのような帳箱であり、錠前を付けて錠がかかるようになっていた。この錠は町年寄が預かっていた。帳箱それ自体も史料文言を素直に解釈して町年寄宅に置かれていたと考える。それに対し、使用頻度の最も低い文書、例えば宗門帳など5件は町会所奥の土蔵に収納されていたし、町会所には「一番箱」と名付けられた、相対的に使用



写真3

頻度の低い文書59件を収納する帳箱もあった。なお、1821年には帳箆筒Rが製作されたので、その時点で年寄預かり箱に保管されていたもののうち、使用頻度の高い文書は帳箆筒に移された可能性があるが、確定できない。こののち、町年寄預かり文書が増大することにより、相対的に使用頻度の低い文書を収納する帳箱として、1780年から存在したLの帳箱が1844年以後に二番箱として指定され、これも町会所に置かれたと想像したい。

②町年寄が預からない文書は1803年時点では大量に存在していた。しかし、その後新しく作成

27) 保坂裕興「近世五郎兵衛新田村の記録管理と村政」（『学習院大学史料館紀要』7、1993年）、青木睦「高山町年寄文書の保管容器について」（高木俊輔・渡辺浩一編『日本近世史料学研究』（北海道大学出版会、2000年）など。

された文書以外に、戦国期以来の非常に年数の経過した文書も多数追加登録されている。この現象は一つの可能性として、町代一件のような訴願運動が行われることにより、過去への関心が高まったということも考えられる²⁸⁾。つまり、自らの町や町組の伝統を主張するための根拠となる文書を町年寄の管轄下において、不定期にせよその存在が点検されるように措置したのではないか、ということである。

③町年寄が預かることのない六角町文書としては、譲り状正文があった。町年寄の管轄下にあるのはその写し帳面であった。譲り状は、相続という町共同体構成員の交代にかかわる重要文書であったため、輪番制の町年寄とはいえ、特定の人物の管轄下に置かれることを避ける仕組みであったものと思われる。そのことは譲り状箱Cの態様にも表現されているのではないか。この箱は六角町文書の現存保管容器のなかでも、帳筆筒を除いては最も手の込んだ箱であった。

そのほかに、町年寄が預かることのない文書として囃子方の文書がある。これを収納する容器としてB「囃子方勘定書物箱」があった。これを町年寄が預からない理由は、囃子方は祭礼組織の一部なので、町年寄とは組織上相対的に別系統であるからとも考えられる。一節で使用した町式目帳には、「祇園会之事」という祇園祭運営規定も記されており²⁹⁾、それによれば毎年「山行事」を町内から4人選任して六角町の祇園祭を運営しているようである。厳密には六角町内部の祭礼組織の検討を必要としよう。

さらに、町年寄の管轄下に置かれないものが現存六角町文書にはいくつかある。これについては節を改めて検討したい。

4. 上位組織との関係

町が近世都市の町方における最も基礎的な組織体であるとする、その町の連合組織といべき組織体が上位に存在することが一般的である。それを組合町といい、さらに組合町がいくつか連合してさらに上位の組織体を構成している場合、それを惣町という。

六角町は、六角町よりも南方に地理的にもややまとまって分布する鶏鉾町・白楽天町・百足屋町・小結棚町など13町とともに仲十町組に所属していた。仲拾町組はさらに、他の七つの町組とともに下京（下古京八組）という惣町を構成していた。下京を構成する他の町組名は、南良組・上良組・仲九町組・三町組・川西九町組・巽組・川西十六町組である。下京には全体で607町が所属していた。京都は巨大都市であったので、他に四つの惣町があった。それは、上京（12町組、757町）と禁裏六丁町組（80町）および東本願寺寺内（59町）・西本願寺寺内（61町）である。これらが単なる行政組織ではなく自治団体でもあったことは個別町と同じである³⁰⁾。

現存六角町文書のなかには、厳密には六角町文書ではないものもある。その例として、最初に1801年（享和元）12月「御所司代御出迎定書」[26-451]を見てみたい。この文書は、新任

28) 訴願運動もしくは上位権力への説明活動と文書保管の関連については、拙著『まちの記憶—播州三木町の歴史叙述—』（清文堂、2004年）を参照。

29) 前掲『史料叢書7 近世都市の組織体』60-63頁。

の京都所司代が京都に赴任してくるときに洛中の町人代表が山科まで出迎えに行くことに関しての諸規定である。作成者は「下古京六組中」とある。これは洛中に存在する六つの惣町の一つである「下京」のことである。したがって、この文書は下京文書の一つであり、表紙には「組箱拾六番」と記された貼紙がある。この16番は2節で検討した六角町町年寄預かり文書目録とは全く別系統の番号である。下京という別の組織体の文書であるからである。「組箱」という名称の下京文書を保管する箱の存在も窺える。

また、この帳面は専用の保管容器に納められている。それは表3の保管容器Aであり、材質は杉であるけれども塗装は生漆であり、「御廟野御出迎定書」といった蓋表などの文字は全て漆で書かれている。組紐もついているので、帳面箱としては上等の作りである（写真4）。表3に示したようにこの箱の製作年月は収納文書の作成年月と一致しており、文書一点専用の保管容器はその文書の様式の一部として検討されるべきであろう。

現存六角町文書のなかにある下京文書としては、1819年（文政2）「下古京八組大割寄合式



写真4

法書」も挙げることができる³¹⁾。表紙には「拾三番」という朱書があり、これも町年寄預かり文書番号とは別系統の文書である。その内容は下京の大割勘定寄合の規定書である。大割勘定寄合とは、上京・下京が負担する江戸への年頭献上物や所司代・町奉行への地役礼銭などの諸費用を、町組年寄の責任のもとで各町組に割り当てることで、上京・下京の最も重要な寄合であった。この規定は、冒頭に記されているように1817年（文化14）のいわゆる「町代改義一件」という町組

と町代との間の大訴訟ののち、1723年（享保18）以来途絶えていた大割勘定寄合が復活されたときの規定である。本稿での関心からは特に以下の部分が注目される。

一、八組帳箱上座ニ置、大割寄合前日ニ当番町へ相渡可申事

八組箱取渡シ請取之案文

覚

一、八組箱

并ニ八朔寄合会礼
風呂鋪包之札
草履之札
雨具之札

右槩ニ請取申候、已上

年号月日

何組 何町

30) 以下本節の記述は、秋山國三『近世京都町組発達史』（法政大学出版局、1980年、原著は同著『公同沿革史』上、1944年）、辻ミチ子『転生の都市・京都一民衆の社会と生活一』（阿吽社、1999年、該当部分の初出は同著『町組と小学校』1977年）、杉森哲也『町組と町』（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅱ、東京大学出版会、1990年）による。

31) 前掲『史料叢書7 近世都市の組織体』167-172頁。[26-452]

苗字誰

何之御組 何町

苗字誰様

ここからは、「八組帳箱」というこの団体の文書保管箱が存在し、それを大割勘定寄合の場の上座に置き、寄合の前日に前の当番町から次の当番町へ引き渡される規定であったことがわかる。引渡しの際には袴を着用するという準正装が求められた。さらに、引継ぎの受取証文が定式化されていたこともわかる³²⁾。

三番目の例として、1821年(文政4)12月「下古京八組御制禁御朱印封印鑑」がある³³⁾。この史料も、「町代改義一件」のあとに作成されたものであり、「御朱印」のなかでも特にここでは徳川家康の禁制の保管者が町代から上京・下京に移ったことに伴って成立した帳面である。これには6ヶ月に一度「御朱印」を預かる当番の町組が交代していることが1857年(安政4)まで記されている。表紙には「三拾三番」という朱書きがあり、これも1節でみた六角町町年寄預かり文書の番号とは系統が異なる。一つ目の例の「十六番」と同じ系統の番号、つまり大胆に踏み込んでいうと、「八組帳箱」の番号である可能性がある。

ところで、ここで注目しなければならないのは、この史料の持つ文字情報以外の情報である。まず、装丁である。この帳面の装丁は大変優美で、書籍の装丁と同じである。表紙には葵の文様が散らしてあり、青い角裂かどぎれ(背の上下端を保護するためにかぶせられた小さな絹布)も付いている³⁴⁾。

次に保管容器についても述べる。この帳面にも専用の帳面箱が作られている。表3のPにも示した通り、材質は杉ではあるが塗装は外側が紅柄で内側が生漆である。蓋表には「御制禁御朱印封印帳 下古京八組」、蓋裏には「文政四年辛巳十二月」という漆書があって、さらに蓋表右上にも「三拾三番」という貼り紙がある。蓋固定方式としては組紐が付いている。この帳面が作成されると同時にこの専用の帳面箱も作成されたことが判明し、帳面そのものの装丁と保管容器の特に塗装の丁寧さ、また組紐も付いていることから、この帳面が表3のT、eといった帳面箱と比較して特に重要視されて作成されたこともわかる。「御朱印」それ自体も唐櫃

32) 六角町文書「古京中之組定法覚 御所司代様名前扣」[26-449]のなかで、「頭町廻」という仲十町組内の何らかの役割の順番を記したところに、1800年(寛政12)8月1日付けの仲十町組矢田町から南良組七観音町への八組帳箱引渡証文と受取証文の写しが添付されている。その次の「寄合番」(仲十町組の寄合を開く担当町か)の順番を取り決めたところに、八組帳箱受取証文雛形が筆写されている。以上から、18世紀末には、つまり町代改義一件以前にも八組帳箱が存在したことが知られる。また、1838年(天保9)2月に下古京七組(下京)が作成した「臨時恐悦諸記目録并請取渡之印鑑」(三条町文書D I 23、京都市歴史資料館紙焼写真)には、銀杏の木で新調された「臨時恐悦諸記録箱」が登録されている。1760年(宝暦10)以来1838年までの、年頭拝礼のような定期的な儀礼行為とは別の将軍代替わりや若君誕生などの際の儀礼行為に関する記録26件が保管される箱がこの時に製作されたことがわかる。しかも、箱とその鍵は、下京を構成する別々の町組が一年交替で保管する体制になっていた。少なくとも下京では、次の例で説明する御朱印箱も含めて、複数の帳箱やその鍵が、別々のローテーションで引継ぎ保管されていたらしいことが窺われる。

33) 前掲『史料叢書7 近世都市の組織体』173-232頁。[27-458]

34) 前掲『史料叢書7 近世都市の組織体』17頁図版3参照。

で運搬されたことは従来から知られている³⁵⁾が、「御朱印」の保管にかかわる帳面も、かなり手の込んだ様態を持っていたのである。

なお、内容は下京に関することであっても、六角町が所属町としての判断から筆写する文書もある。その例として、1781年（天明元）閏5月9日「四朔会合仕法書」[26-450]が挙げられる。内容は下古京六組（下京）の八朔会合の規定である。表紙には「七拾八」という番号が打たれていることから、1節で検討した町年寄預かり文書目録に登録されているものであることがわかる。下京文書を六角町で写したものと考えられる。したがって、この文書は狭義の六角町文書に属するのであり、下京文書すなわち下京という組織体が授受作成していた文書ではない。このような例は後述の仲十町組文書に多く見られる。

このように、下京という組織体は独自に文書を保管する仕組みを持っていたものと思われる³⁶⁾。それが帳箱の当番町による引継という形態をとるのは、個別町とは異なって惣町は近世中期以降会所を持たず、文書保管空間がないという物理的な理由が前提として存在する。ただ、より本質的な理由を考察すべきであろうが、ここではこの程度の指摘にとどめたい。

六角町が所属する仲十町組についても事情は同様のものと思われる。まず、現存六角町文書のなかから手がかりを探してみたい。ただ、現存しているものはいずれも六角町が所属町として作成した文書ばかりである。それは以下の4例である。

①1821年（文政2）町式目扣 [3-18]

これは六角町の式目ではなく仲十町組の式目だが、表紙に「六角町」と記されている。つまり、内容は組合町のものだが、六角町が仲十町組文書から筆写したものと思われる。表紙の「百三拾」という番号により町年寄預かり文書であることが確認できる。内容は、町屋敷の買得・相続・養子・婚姻などの際の出銀規定である。

②1751年（寛延4）「中組古来留帳」[25-448]

これも「百四十三」という番号から町年寄預かり文書であることがわかる。仲十町組文書を六角町で控えたものであろう。内容は、「従先規毎歳大割小割勘定覚」（江戸年頭御札献上物・町奉行年礼などの費用負担）を始めとする下京の構成町組として行う業務の記録である。

③「古京中之組定法覚 御所司代様名前扣」[26-449]

裏表紙に「六角町」とあり、表紙の番号「拾三」から町年寄預かり文書であることもわかる。中十町組文書を六角町で筆写したものと判断できる。内容は、②に類似し、特に②のあとの時期つまり1751年以降の記載が詳しい。

④「組町式法書」[27-456]

裏表紙に「六角町」とあるので、この帳面そのものの作成は六角町ということがわかる。番号は「貳百七拾九」である。一節で検討した目録は242番までであったが、この文書は安政期（1854-59年）のものなので、恐らく町年寄預かり文書であり、1844年（天保15）以後279番まで番号が増加したものと想像する。内容は、1859年（安政6）の下古京八組集會費用の縮減に関

35) 河内将芳前掲1992年論文。

36) 河内将芳前掲1997年論文は、上京について「御朱印」を除く他の帳簿類が1572年（慶長2）の時点ですでに上京立売組の月行事町の手で持ち回りされていたと指摘している。

する、仲十町組での取り決めである。構成町の捺印があり、かつ以下のような文言も見られる。

(前略) 尤此度定書組町一同連印之上、壱町限り所持致候而、寄合順番相廻候節者、外組之例ヲ不用、町々所持之定書取出シ其準拠ヲ以相勤可申候。是迄定書有之候得共、座上之箱ニ預ケ有之候故、折角之定書忘却相成候間、無益之姿ニ相成候故、此度者壱町限組町一同連印之定書所持致シ後年ニ至候而も右之趣相互ニ急度相守可申候事。

つまり、同内容の帳面が12冊作成され12の構成町が1冊ずつそれぞれの個別町文書として保管していたものである。したがって今までの例とはやや異なるものの、内容は仲十町組だが狭義の六角町文書であるという点では同じである。

以上のように、現存六角町文書のなかで本来仲十町組が保管していたと考えられる文書は今のところ見出しえていない。しかし、仲十町組の帳箱が存在したことは、先の引用史料における「座上之箱」という文書からわかる。そして、その箱にはこの文書(組合町の会合規定書)が納められていたが参照されていないとある。このことはこの箱が折りにふれて参照される文書を収納する容器ではなかったことが示唆される。「座上之箱」という表現からはこの箱が寄合の場に持ち出され、しかも先の惣町レベルの「八組帳箱」と同様に上座に据えられていたのかもしれない。

さらに、先に説明した「古京中之組定法覚 御所司代様名前扣」[26-449]には、寛永10年11月3日付け、下京町代松原長左衛門が下京中と川西組に宛てた、町代の給分は惣町中が決定し、惣町中の意に沿わない場合には町代を辞することなどを記した一札が筆写され、そのあとに、

右証文本紙仲之組拾町帳箱ニ納メ有之候、尤清訓帳ニ文段写有之候事也

寛政四年子九月廿八日書写達申候也 当町年寄深田三郎右衛門

とあり、他にどのような文書が収められていたのかは不明ながら、1792年時点ですでに仲十町組の帳箱が存在したことは確かである。

したがって、町組レベルでも独自の文書保管があったことがわかる。ただ、仲十町組の文書保管についてはこれだけだとあまりにも断片的なので、以下別の町組の事例を紹介したい。

以後は、仲十町組と同じ下京に属し、また現存史料との照合が可能な例として、上艮二十八町組の例を見てみたい³⁷⁾。それは表4の1、2、3の三つの表を検討することになるが、まず史料と表の関係を説明しておく必要がある。

No11の目録は以下の三つの部分に分かれる。

- ①1789(寛政元)年4月、「当町虎石町」が作成した板倉周防守および牧野佐渡守在判条目合計3通を含む文書4件の目録。
- ②1822(文政5)年作成と推定される文書15件の目録。
- ③1822年作成と推定される「壱」から「十四」までの番号が付された目録。

No17の目録は、④1831(天保2)年正月20日に「当町丸屋町」が作成した「四番七口」から「拾七番」までの21件の文書目録、および⑤それに1842(天保13)年から1867(慶応3)年まで追加登録された箱一件と「拾八番」から「廿貳番」までの文書5件の目録、からなる。末尾

37) 柳八幡町文書No11、17「二十八町組各町有文書目録」(京都市歴史資料館紙焼写真)

表4の1 二十四町組文書目録1

A (帳箱入目録 文政5年分) 柳八幡町文書紙焼No16			B 帳箱入目録 天保2年正月20日 No17			C 現存史料				
記載順	記号	年代	表題	形態・数量	当番町	番号	当番町	備考	紙焼き写真番号	備考
1		宝暦14年4月	新規願之儀ニ付組町連印控帳	1冊	柳馬場八幡町	四番七口	柳馬場八幡町		10	貼り紙番号なし
2		宝暦14年5月	同火役水寄道具連印書付	1通	同虎石町	四番七口	同虎石町			
3		明和5年	此度御改メ新治券状御印頂戴仕右御札として年寄共罷上り候節口上書	1通	御池大東町	四番七口	御池大東町			
4		安永3年正月	非田院合力之義被為仰付候ニ付御諸書組町不残連印ニ而差上候写	1通	御幸町大文字町	四番七口	御幸町大文字町			
5		安永5年10月	日光御社参御触状	1通	当町虎石町	四番七口	当町虎石町			
6		天明5年10月	塚本氏取替銀手形并帳面	1通・1冊	当町中山町	四番七口		町代長兵衛取替銀帳面1冊、町代塚本長兵衛を寛政13京都武藏で確認		
7		文化14年11月	訴状匣銘書御触	1通	当町橘町	四番七口	当町橘町			
8	い	文化14年11月	古文書十一葉 修補	1巻	当町橘町	七番		古文書 式巻	1か	
9	ろ	文化15年2月	古文書十五葉 修補	1巻	当町下本能寺前町					
10	は	文化15年2月	帳箱入目録 巻軸新調		当町下本能寺前町				11の可能性がある	
11	に	文化15年2月	周防守様御条目	1通箱入	当町下本能寺前町	六番			5	現存状態に墨書「に」と貼紙「六番」
12	ほ	文政2年3月	御朱印之写	帳面1冊	当番町松下町二面写	八番				
13	へ	文政2年5月	文政改正諸願手続認書扣	1冊	当町八幡町	拾五番			16	貼紙「拾五番」
14	と	文政3年5月	町代一件済証文写	1冊	当町尾張町	拾番			13	貼紙番号なし
15	ち	文政5年6月	衣棚南町へ八組集メ町代給分相渡し候請取書	1通	当町尾張町					
		文政5年6月	衣棚町より之達書	1通						

表4の2 二十四町組文書目録2

A (帳箱入目録 文政5年か) 柳八幡町文書紙焼No16				B 帳箱入目録 天保2年正月20日 紙焼No17			C 現存史料		
記号	年 代	文 書 名	形態・数量	当番町	番号	当番町	文書名	紙焼き写真番号	備 考
一	文化14年7月3日	上良組拾貳丁年寄中初メテ町代相手願書写 別二下古京八組中より町代申渡シ普写	1冊		九番				
二	文化14年12月	下古京五組改願書	1冊		拾貳番				
三	文政元年8月7日	下古京申合之事	1冊		拾三番				
四	文政2年8月	組町式目覚	1冊		拾一番			14の1	貼紙「拾一番」、末尾に五人組頭の連名、半紙判
五	文政2年4月	家屋敷売買之節町代奥印并吟味料 御差止メ之御触	1通						
六	文政2年7月	町代二季祝儀集帳	1冊	当町等持寺町					
七	文政2年8月	組町式目覚帳	1冊	当町	拾一番			14の2	貼紙「拾一番」、五人組頭の連名なし、美濃判
八	文政2年11月	古町よりの請取書	1通	当町東八幡町					
九	文政2年	桓武天皇御社陵旧記	1巻		五番				
十	文政3年正月	古町積金之控	1冊	当町丁子屋町					
十一	文政3年12月	町代長兵衛備用銀願書 并請取証文	2通	当町松下町					
十二	文政5年9月	買得改会所一件返答書扣		当町松下町					
十三	文政8年8月	御所司代御上京御迎当町願番帳写シ 尤本紙帳ハ願番当町願々相廻り在之事		当町大文字町	拾四番				
十四		極目当町留書	1通	当町姉小路大東町					
*十二以降追筆					拾六番		諸書付色々九口		
					拾七番		帳箱入目録	17	

表4の3 二十四町組文書目録3

B 帳箱入目録 天保2年正月20日 紙焼№17				C 現存史料
番号	当番町	文書名	年代	番号・備考
	柳八幡町	当町箱 新調	天保13年7月	
拾八番	当町油屋町	二条御番衆寄宿増町被仰渡之写 1冊	万延3年閏3月	
拾九番	当町尾張町	御上洛拝領御金割賦添書 1巻	文久3年5月	
式拾番	当町尾張町	御上洛拝領御金当式拾八町え割賦 録1冊、八組集軒役覚1冊	文久3年5月	20、21 いずれの 表紙にも朱書「式 拾番 式冊之内」
廿一番	当町山本町	御宸翰之写1巻、御誓文之写1巻	慶応4年3月	
廿二番	当町山本町	当組内町代新規古遣之控1冊	慶応4年3月	

には明治初年の文書が添付されているが目録との関係は不明である。なお、本目録の形態は巻物であり、その軸の上部に附属した細長い駒形の本に重要な文字情報が含まれており、それは後述する。

保管文書の経過を観察するために、表は以下のように作成した。表4の1は②と④、表4の2は③と④、表4の3は⑤から作成し、それぞれの右端に現存史料との照合結果を記入した。①に関しては②以降の文書目録との関連が判明せず、検討の対象外とした。

表4の1と2を見ると、文書一件ごとに「当町」の記載がある。これは12のところで「当番町」という表現が見られるように、それぞれの文書が発生したときに町組運営の当番についていた町を示していると考えられる。この推測は、1764（宝暦14）年4月「新規願禁令につき二十八町組連印写帳」³⁸⁾の末尾に「右為後日之如此記置之 其時当町柳馬場御池下ル八幡町 年寄八郎兵衛」とあることから支持される。また、後年の史料ながら、この町組に所属する虎石町文書のなかには二十八町組の諸出銀集帳の綴りがあって、虎石町が町組の当番として徴収した出銀の帳簿を作成し、そこに「当町虎石町」と記している³⁹⁾。

表4の1に戻って、A欄の10には「帳箱入目録」とあり、二十八町組の帳箱が存在したことが判明し、この帳箱にはA欄の文書が収納され、当番町により引き継がれていたであろう。表4の2、B欄の最下段にある「帳箱入目録」は現存史料№17のことである。この文書は巻物形態で、その軸の上端に長さ5cmぐらいの細長い駒形の本が附属し、その表には「帳箱入目録」、裏には「丑寅廿八町組」、左側面には朱書で「十七番」と記されている。したがって、1831年時点ではB欄の文書がこの町組の帳箱に収納されていたことがわかる。表4の3に見られる通り、この文書目録には幕末まで追加登録がなされた。

表4の1、A欄とB欄の当番町の欄を比較しても記載がある限りにおいては変化が全く見られず、当町の意味に関する先ほどの見解を支持する。文政期目録（A欄）に記載され、天保2年目録（B欄）に見当たらない文書が9件見られ、これは「拾六番」の「諸書付色々九口」に件数が一致するので、帳箱文書の全てが「廃棄」されることなく、新規に文書を受け入れてい

38) 柳八幡町文書№10。

39) 虎石町文書№1（京都市歴史資料館紙焼写真）

ることが想定される。また、9件の文書が文書名を記されことなく一括されたことは、一括登録された文書を目録作成者が重視していなかったことを示し、組合町における文書保管の参考事例の一つ目に挙げた、立売親八町組の事例に類似したことを、この町組でも行っていた可能性がある。つまり参照可能性の低い文書を一括したのではないかということであるが、想像を逞しくしすぎたであろうか。

個別の文書に関しては、C欄において現存史料が確認できるものがいくつかあるので、六角町文書では1点も確認できなかった町組文書がここではっきりとしてくる。ここでは1例だけ検討しておこう。現存史料№16は表紙に「諸願手続認振扣 八幡町」とあり、一見、柳八幡町という個別町文書に見えなくもない。しかし、表紙裏には以下3点の小切紙が貼付されている。

1. 亥5月19日 町代給分出銀請取書 上良組当番役行者町作成、太郎助貳拾八町御組宛
2. 辰11月28日 同上 上良組当番町作成、良廿八組御行事町宛
3. 文政3年12月 年頭諸入用銀請取書 町代惣会所作成、貳拾八町組行事町松下町宛

あて先はいずれも二十八町組であり、しかも三つ目はその時点の当番町であった松下町であって柳八幡町ではない。このようにしてこの帳簿のその時点の保持者すなわち二十八町組の当番町が受け取った文書がここに貼られたのである。したがって、この帳簿は個別町文書ではなく組合町文書である。そのため「拾五番」として組合町の帳箱に保管されたのである。

この廿四町組の文書保管でもう一つ論点を提示しておこう。

表4の1A欄では省略したが11の「周防守様御条目」には「右御触状之写当御組町前以御伝来無御座候ニ付、此度御組町之内去方より御寄附被成度御願御座候故、帳箱へ入レ置申候趣意は右御触状仮箱之裏ニ書付在之候、御覧被下候事」という注記があり、初期の惣町あてに発給された町触の写を所持していないために新たに筆写され、町組の箱に入れられたこともわかる。

この状箱も現存し、その蓋裏には「此御触状は世間ニ而貳拾一ヶ条と申候御条目之内ニ御座候処、年来当組ニ相伝無御座候ニ付、此度外方所持之御真本を以写取申候。御組町一廻御披見之上、右御条目類一箱え納置候様致度存念ニ御座候事」と記され、状箱本体の外側底部には「文化十四丁丑年六月 臨模、同十五年戊寅年二月 表莊」とあって、この条目が1817年に模写され1818年に表装されたことがわかる。これらの記述は文書目録の記述に完全に合致している。また、この模写が町組内に披見されようとしていることも注目される。板倉二十一ヶ条は写であっても町組が保管し、それを町組の構成町が認知しなければならないという意識が存在したのである。

これに関連しては、現存史料№1が1595（文禄4）年から1642（寛永19）年にかけての一紙文書を表装したものであり、表装内側の袖に「丑寅廿八町組」と明記され、末尾に「文化十四年丁丑之冬修補」と記されていることも興味深い。これらの記述は、表4の1A欄の8「い」の「古文書十一様」、同表B欄「七番」の「古文書 二巻」に対応するものと思われる。なぜなら、年月が一致しているからである。残念ながら「十一葉」については現存史料№1が9通10葉であるので一致しないが、間違いはないであろう。このことから、表4A欄の年代が近世初期の文書に関しては模写もしくは表装の年代であることも確定できる。「ほ」の「御朱印之写」についても、「町代改儀一件」の結果を受けて1818（文政元）年に町代から下京に保管が移った「御朱印」の写帳面をこの町組がその翌年に作成したことが判明し、これまた興味深い。二十四町組は古町の町組である仲十町組とは異なり、新町の町組であって、相対的に伝統

が新しく格式が一段下であった。そのため、「御朱印」の保管儀礼とは無関係であるのだが、そうした新町の町組がわざわざ「御朱印」の写帳を作成しているのである。

したがって、板倉二十一ヶ条に限らず、この時期にこの町組では多くの近世初期文書を「古文書」と認識し、所持していないものは模写し、所持している原文書は表装し、帳箱目録に登録して、将来への伝存を計っているということがわかる。

ここで想起されるのは、六角町という個別町レベルにおいても、1803年以後1824年までの間に戦国期や近世初期の文書が町年寄預かり文書に新たに登録されていたことである。この時期に戦国期や近世初期の文書に対する取り扱い方が確実に変化しており、それは歴史意識の変化との相互作用の一つの現れであることが予想される。そして、このことは18世紀半ば以降1817年の町代改義一件に到る経過との関連で説明できる可能性があることをここでは指摘するに留める。

以上のように、京都の町組の文書は、町組の箱に保管され、町組の運営責任者が一月で交代していくことに合わせて引継がれていたと推定される。それは、町組が個別町と異なって会所を持っていなかったため、文書の固定的な保管空間が存在しなかったからである。

したがって、引継文書の参照可能性の違いによる区分は、個別町では保管容器や保管空間を替えることにより行われていたことに対して、組合町では同一容器内で区分するような工夫がなされていたと言えよう。

また、個別町の上位組織である組合町においても、文書保管の変化から歴史意識の問題にアプローチできる可能性があることも示した。

むすびにかえて

六角町に即した以上の知見を、アーカイブズの実務に結びつけるとすれば以下のようなになる。惣町・組合町・個別町がそれぞれ独自に文書を保管する組織体であることがほぼ明確になった。したがって、現存個別町文書を原秩序尊重の原則に従って目録編成するとすれば、京都における現存個別町文書というフォンドには、惣町・組合町・個別町というサブフォンドが存在することが予想されることとなる。さらには、六角町においては囃子方という六角町内部の祭礼組織や、彼岸講（表3 保管容器e）という講組織などのようなサブフォンドも想定されることとなる。このように過去（文書現用時点）の文書保管を究明することは歴史的記録史料の目録編成にとって重要な研究課題であることが改めて確認されるのである。

次に、歴史学の文脈では以下のように展望する。

- ①京都六角町では、3年で交替する町年寄が大半の個別町文書を管轄していた。これは共同体の文書を共有する一つの方法であり、家持町人の間では比較的フラットな構造を持つと言われる京都の町共同体の特質と照応関係にある。さらに、譲り状のような共同体構成員の認定に関する文書に限っては、町年寄の管轄下に置かれず、より純化した「共有」の形態として町会所という共同施設に置かれた「譲り状箱」に保管された。
- ②個別町文書の上のレベルでは、組合町と惣町がそれぞれ独自に文書を保管していた。そうし

た文書はそれぞれの個別町の必要性に応じて筆写され、個別町文書としても保管されていた。したがって、都市行政情報は部分的には同じものが個別町・組合町・惣町の三つのレベルで重層的に蓄積されていたこととなるが、問題は三つのレベルの蓄積情報にどのようなズレあり、そのズレが必然化する情報交換のあり方はどうなっているのか、という点であろう。この問題には町奉行所における情報蓄積との関係も視野に入れなければならない。

- ③個別町でも組合町でも惣町でも、19世紀初頭に、中世末・近世初期文書の保管のあり方に一定の変化が見られた。直接的な契機としては町代改儀一件が予想されるが、より大きくは都市社会構造の変動との関連が説明されなければならない。

最後に、地域的特質の問題も指摘して本稿を終えたい。近世京都の町方文書は、町代文書と「御朱印」を除いては特定の家に保管されず、基本的には交代制の担当組織(月行事町・当番町)・担当者(町年寄)が帳箱により引き継ぐことが特徴的である。

これに対し、江戸においては、個別町レベルでは世襲の支配名主家が文書を保管し、奉公人請状・宗旨請状といった文書類ごとに懸硯・筆筒・洪張箱といった保管容器に収納し、それぞれの内部で支配町ごとに分類し、町中連判(町触の請書)は支配町ごとの「小筆筒」に収納されていたように見受けられる⁴⁰⁾。支配名主のもとで各町では、月行事と書役が番屋に筆筒で文書を保管していたようである⁴¹⁾。固定された家、固定された空間で保管されたことが京都と比較した場合、著しい特徴であろう。

江戸については京都に比べると手がかりは著しく減少し、また町方文書保管について検討されたこともないと思われるが、京都と対照的なことはほぼ確実であり、これは既に指摘されている町共同体の類型差⁴²⁾の反映という説明も可能であろう。「はじめに」で紹介した西木氏の問題提起についても本稿のような文書保管に関心を持つことが解明の糸口になるものと思われる。

[追記] 六角町文書の調査(1993-97年)をご許可いただき、また今回保管容器の写真掲載をご承諾いただきました北観音山保存会に深く感謝申し上げます。

また、六角町文書の調査に参加された方々にもここに記して感謝致します。大場菊乃・小川保・岩淵令治・上甲典子・杉森哲也・富善一敏・西坂靖・保坂裕興・森下徹・若松正志(50音順、敬称・所属省略)。

なお、本稿は、文部省科学研究費補助金・奨励研究A「近世における町共同体の比較的研究」(1995年度、研究代表者渡辺浩一)の成果の一部である。

40) 「諸事証文目録帳」、「連判帳之入目録・証文入目録・赤坂連判帳之入目録」(南伝馬町高野家文書、東京都公文書館所蔵)

41) 四谷塩町一丁目文書(江戸東京博物館所蔵)、麴町十二丁目文書(新宿区立歴史博物館所蔵)

42) 吉田伸之「町人と町」(『講座日本歴史』五巻、東京大学出版会、1985年、のち同著『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、1998年に収録)